

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第 卷八十第

行發日一月二年三十正大

## 論叢

地租の轉嫁……………法學博士 神戸 正雄  
 政治現象の本質……………法學士 恒藤 恭  
 海運の獨占より生ずる弊害……………法學士 小島昌太郎  
 世界經濟の意義……………法學士 作田 莊一  
 鎌倉時代の土地制度……………文學博士 三浦 周行

## 時論

爲替の大變調と對策……………法學博士 神戸 正雄

## 說苑

名目派の貨幣論と貨幣の本質……………經濟學士 中西 仁三  
 一子相續制度に就いて……………經濟學士 八木芳之助

## 雜錄

マルクス說に於ける資本の起源……………法學博士 河上 肇  
 東西金利市場の相違に就て……………經濟學士 谷口 吉彦

雜 錄

マルクス説における資本の起源

河 上 肇

ボーム・パウエルクは、生産を直接の生産と迂回の生産とに分ち、さうして迂回の生産の手段として役立つ中間生産物(Zwischen-Produkte)を總稱して資本と謂ひ、斯かる資本の助けによつて行はるゝ生産を資本制生産(Kapitalistische Produktion)と名づけた。資本を此の如くに觀念することは、多くの學者の一致するところであるが、しかし人間はフランクリンが言つたやうに tool-making animal であるから、もし道具の如き中間生産物を總て資本と名づけるならば、資本は——從てまた資本制生産は——人間そのものと起源を同じくすると謂はなければならぬ。

否な、道具を使用すること(製造することではない)は、猿でさへ既に行つてゐることだから、もし斯様な道具が資本であり、斯様な道具を使用する生産が資本制生産であるならば、嘗てウンタアマンが言つたやうに「猿も亦資本家である」と謂はなければならぬ。斯様に資本および資本制生産の意義を無暗に擴張することは、現代の資本制生産の永遠性を辯護せんとする學者達が、其の常套手段とする所であるが、吾々から見ると、それは一種の魔術のやうなものである。彼等は、現在の社會に行はれてゐる資本制生産の永遠性を立證するために、先づ資本および資本制生産の意義を定める。その時、逸早くも此等のものから其の歴史的特徴を抜き去り、之を以て人類經濟の或る永遠的條件と置き換へる。そこで名は依然として資本であり、資本制生産であるが、實は現代の社會組織を特色づける何物でも無くなる。しかも彼等は、彼等が此の如くに改造したる資本や資本制生産の永遠に存在すべきことを論證することに

1) Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins, I Buch, I Abschnitt, (S. 21.)

2) Untermann, Marxian Economics, 1913, p. 21.

より、恰も現代の社會組織を特色づけつゝある資本および資本制生産が永遠に存在すべきものであるかの如くに論結する。斯様な論理的缺陷をば、彼等自身が意識してゐる譯ではあるまいが、しかし吾々から見れば、その論法は一つの奇術に等しい。

資本をば人類經濟における此の如き絶對的範疇と看做すことに對立して、之をば一つの歴史的範疇に過ぎざるものとすは、マルクスである。しかしながら私の見るところによれば、マルクス説を祖述せる人々の中には、謂はば反動的に、資本の起源をば、餘りに近代に引き寄せつゝある者がある。例へばラファルグの『財産の進化』を見るに、彼は資本の起源をば資本制生産(資本家的生産)の起源と同一視することに、之を以て近代の事實に屬すとすなはつゝあるもの、やうである。彼れの説くところによれば、資本は、近代における自由労働者——労働力を商品として賣る賃労働者——の發生と共に始めて成立し得たもの、如くである。けれど

も、資本の起源を斯様に新しきものと見ることは、彼が攻撃するところの『資本をば世界と起源を同じくする』と見る説に對して、更に一方の極端に馳せたものであつて、また恐らくマルクスの眞意でも無からうと思ふ。

勿論マルクスの書き残したものの中には、資本は資本家的生産方法(資本制生産方法)の下においてのみ存在し得るもの、如くに説かれてある箇所がある。例へば彼れの初期の作物たる『賃労働と資本』のうちには、次の如く述べてゐる。

『……………古代の社會、封建の社會、有産者的社會は、斯様な生産諸關係の總和であつて、その各々が同時に人類の歴史における一の特定の發展階段を表示してゐるのである。資本もまた一の社會的生產關係である。それは有産者的社會の有産者的生産關係である。……………』<sup>3)</sup>

之で見ると、資本は有産者的社會の有産者的

3) 荒加勝三氏譯本、16頁(藤田學士の譯本は『財産制度の發達』と題する。同書18頁) 參照  
4) Lohnarbeit und Kapital, 拙譯本、58頁

生産關係(即ち資本家的生産方法)の下においてのみ、始めて資本たり得るが如くである。彼は更にいふ、――

『何うして商品の一定量、交換價値の一定量は、資本となるのか?』

『それは、此等のものが獨立した社會的の力として、即ち社會の一部分の力として、直接の活きた勞働(力)(註)に對する交換によつて、それ自らを維持し且つ増加する、といふことによつてだ。勞働能力以外には、何物をも有たない一つの階級が存在することが、缺くべからざる資本の前提である。』

(註茲に「勞働」としてあつたのを、後に「勞働力」と改めたのは、エンゲルスのしたことである。しかるに、カウツキーは、此の處に註を加へて、マルクスは曾て「活きた勞働力」(lebendige Arbeitskraft)をこの語を用ひたことを無い、彼はただ「蓄積された勞働」(aufgehauene Arbeit)に對して「活きた勞働」(lebendige Arbeit)をいふ言葉を用ひただけだから、エンゲルスが此處の「勞働」を訂正して「勞働力」としたのは、當を得てゐない、と言つてゐる。しかしマルクスは曾て「活きた勞働力」といふ言葉を用ひたことは無い

といふカウツキーの説は、恐らく間違であらう。例へば『資本論』第三卷の或る箇所には、明かに「活きた勞働力」といふ言葉がある。尤も此の第三卷は、マルクスの死後エンゲルスが校訂したものであるから、或は當てにならぬといふ説があるかも知れぬが、それなら、カウツキー自身の校訂して出版した『資本論』の第一卷を見るが可い。そこにも明白に「活きた勞働力」といふ言葉が見出されるのである。これは餘事ながら、序ゆる一言してよく次第である。

さて右の一文を見る時は、資本は賃勞働者の勞働力を買取ることによつてのみ始めて資本となること云ふことが、そこに明白に現はれてゐる。なほ彼は次の如くにも言つてゐる。

『資本は賃勞働を前提とし、賃勞働は資本を前提とする。兩者は相互に條件づける。兩者は相俟つて發生する。……』

『資本は、それが勞働(力)と交換せられ、賃勞働を活動せしむることにおいてのみ、その増殖を遂げ得る。……だから資本の増加は、無産者即ち勞働者階級の増加である。』<sup>9)</sup>是等の文章を見る時は、資本の起源は近代における賃勞働者の發生と時を同じくするといふ

5) 同上、61頁、カウツキー一本、S. 26.  
6) 同上、カウツキー一本、S. 365)  
7) 奇木論第三卷(三本)、S. 548, 560等  
8) 同上、(カウツキー一本)  
9) 同上、推認本、64, 65頁

のが、マルクスの意見であるが如くに見える。そのみではない。吾々は『資本論』そのものについて見ても、吾々が其の第一巻を讀みつゝある間は、資本は依然として近代の産物であるが如くに思はれる。例へば第一卷第二篇『貨幣の資本への轉化』の冒頭を見ると、そこには次の如く述べてある。

『商品流通は資本の始點である。資本は、商品生産および發展せる商品流通即ち商業が、その發展の一定の高さに達した所においてのみ、始めて現はれる。世界商業および世界市場は、第十六世紀において、 die moderne Lebensgeschichte des Kapitals (資本の近代に於ける生涯の歴史)を開始した。』<sup>1)</sup> またいふ、――

『貨幣が資本に轉化するためには、貨幣所有者は商品市場において自由労働者を發見しなければならぬ。二重の意味においての自由労働者。それは、労働者が自由人として彼れの勞働力を彼れの商品として處分する

といふ意味において。他方では、彼が勞働力以外には賣るべき何等の商品を有せず、徒手空拳であつて、彼れの勞働力の實現に必要な一切の物から *entzweit* である(隔離されてゐる)といふ意味において。』<sup>2)</sup>

吾々は此の外、凡そ之に類似の見解を述べたものとして、猶ほ幾多の箇所を引用することが出来る。

ところで、吾々の茲に注意しなければならぬことは、資本の起源に關するマルクスの是等の見解は、總て生産行程における(または生産界における)資本に限られる、といふことである。先きに引用した『賃労働と資本』を見ても、よく其の前後を熟讀する時は、彼が其處で單に資本と謂つてゐるのは、實は *das zur Produktion bestimmte Kapital, das produktive Kapital* (生産に向けられた資本、即ち生産資本)であることが推測せられる。殊に『資本論』に至つては、第一卷は明白に『資本の生産行程』と題してゐるので

1) 資本論第一卷(カウツキー本、S. 104)

2) 同上、S. 152. 高島氏譯本、279頁

3) 前掲拙譯本、66頁參照

あり、從て其處に取扱はれてゐるのは、第二卷および第三卷で特に他の種類の資本と區別されてゐるところの、生産資本または産業資本である。資本が生産を其の支配下に置き、從て資本が生産資本または産業資本たる性質を具ふるに至つて、始めて資本家的生産方法(資本制生産)なるものが成り立ち、また斯かる資本家的生産方法が廣く社會の生産を支配するに至つて、始めて社會は資本主義の社會組織を採るのであり、さうして『資本論』は斯かる資本主義の社會組織を解剖することを其の目的となすものであるから、その研究の眼目はおのづから生産資本または産業資本であり、從てマルクスは此の生産資本または産業資本を指して、屢々單に資本と謂つてゐるのである。さうして謂ふところの資本を斯かる種類のものに限定するならば、まことに其の起源は、資本家的生産方法の成立、從てまた賃労働者階級の發生と、その時を同じくするのであり、それは當然近代のことではなればならぬのである。

けれども、産業資本は資本の唯一の存在様式ではない。之を歴史的に言へば、商業は資本家的生産方法の成立に先だつこと遙なる以前において成立し、從て商業資本ならびに其の『雙子の兄弟』たる利附資本は、産業資本よりも遙に古き種類の資本に屬する。『實に商業資本は、歴史的には、資本最古の獨立存在を代表する』ものであり、同様に『利附資本も亦た實に資本の太初的形態に屬する。』即ち是等の資本は、『資本の antedivianisch (大洪水前) の形態』に屬し、『遂に資本家的生産方法に先だちて、甚しく相違せる經濟的社會構成の下に發見さるゝ形態』に屬するものなのである。

之を要するに、生産資本または産業資本としての資格における資本は、生産行程をば、自己の直接なる支配の下に置くことにより、——言ひ換ふれば資本の力によつて労働者の労働力を商品として購入し、労働者をば資本の直接なる支配の下に置くことにより、——始めて資本と

4) 資本論第三卷(ドイツ本、三の一、S. 321. 日本譯、三の二、266頁)

6) 同上(ドイツ本、三の二、S. 132. 日本譯、三の三、293頁)

なり得るのであるから、それは自由労働者としての賃労働者の存在を、従て資本家的なる生産關係の存在を、その前提とする。その意味において『勞働能力以外には何物をも有たない一つの階級が存在することは、欠くべからざる資本の前提』であり、それは『有産者の社會の有産者的生産關係』の下においてのみ、始めて資本となり得るのである。さうして資本は、斯様にして生産資本または産業資本となることにより、生産界を支配するに至らなければ、社會における資本の勢力は微弱であり、社會組織の上に決定的の方を有たず、従て社會は資本的社會となり得ない。けれども、資本は社會組織の上に斯かる決定的の力を有するに至らざる遙か以前より、——マルクスの言葉を借れば、——宇宙の中間隙際に位せるエピクルの神々の如く、或はまたポロランド社會の間隙に棲めるユデア人の如く、資本的ならざる社會の間隙に、『資本とは無關係な、また其れと獨立した、生産の社會的形態の基礎の上に』その生存を維持

してゐた。『高利貸資本の存在は、生産物の少くとも、一部分が商品に轉化されてゐると云ふことと、同時に商品取引と共に貨幣が種々なる機能において發展してゐると云ふこと以外には、何物をも必要としない。』ただ其れだけの條件さへ具つて居れば、利附資本の舊式の形態たる高利貸資本も、また其の雙子の兄弟たる商業資本も、その存在を保ち得たのである。だから吾々が、資本をば生産資本または産業資本に限定する以上、——或はまた、是等の資本の外に、利附資本および商業資本を認むるにしても、吾々が是等のものをば、『資本家的生産方法の見地から、また其の限界内において』觀察することに、之を以て産業資本の分化したものに外ならずとして取扱ふ以上、——資本は資本家的なる社會組織の下においてのみ發見さるべきものとなるけれども、さうでない以上、資本は『遙かに資本家的生産方法に先だちて、甚だしく相違せる經濟的社會構成の下に發見さるゝ』ものとなるのである。その意味において、資本の起源

7) 同上(ドイツ本、三の一、S. 312. 日本譯、247頁)  
 8) 同上(ドイツ本、三の二、S. 132. 日本譯、三の三、293頁)  
 9) 同上(ドイツ本、三の一、S. 308. 日本譯、三の二、240頁)

は可なりに古いと言つて可い。それは多くの學者が説くやうに、人類の發生と共に成立したも  
のでは決して無いけれども、しかし商品および  
貨幣の發生と發展とにつれ、資本家的生産方法  
の成立に先だつこと遙かなる以前において、既  
に其の成立ならびに或る程度の發展を爲し得た  
ものと見なければならぬ。

